夢の果てに見たものは、

一羽涙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢の果てに見たものは、

【Ｎコード】
Ｎ３２３０Ｓ

【作者名】
一羽涙

【あらすじ】
２７歳の結婚適齢期もいいとこな亜栖弥は、恋よりも仕事に生きるしかないＯＬ。
だったはずが、こんなところに飛ばされ？
人の話を聞いてくれない人達に囲まれ、「は？私には、次のプレゼンまでにまとめておかなきゃいけない資料作りが待ってんのよ！」と突き進む、彼女と彼らのお話。

※注：このお話は、イケメンたちに靡かない主人公がいてもいいじ

ゃないさー精神でできています。

登場人物紹介

＜＜今野　亜栖弥（こんの　あすみ）…

この話の主人公。
日本では、どっかの企業でそこそこ責任のある仕事を任されている。
近々あるはずだったプレゼンも、亜栖弥がこれまで進めてきた企画で、これに通れば本格的に動き出すはすだった。
その為、なにがなんでも元の世界に戻ろうと頑張る。
具体的に何を頑張れば戻れるのかは不明。

←容姿←

・暗めの茶色に染めているが、半年近く美容院に行ってないため、伸び放題のプリン放題。
・前髪は7：3くらいで分けられ、肩に着くか越すぐらい長い。
・前髪以外の部分は背中辺りまで伸びてるのを、いつもヘアクリップで1つにまとめている。

軍のことには疎い亜栖弥でも、某海賊漫画で得られる程度の知識（中将→大将）くらいは知ってる。
なので、オルガー（サイモス）初登場の時も、やっかいなのきたーという意識はあった。
ついでに、あそこにいた兵士たちからしたら天と地ほどの差があるだろう中将があのタイミングで登場したことに、不憫さを感じていたという設定＾＾

＜＜オルガー・サイモス…

中将の位につく軍人。２７歳。
彼の年で中将というのは、異例すぎる出世。
何もできない貴族の高官からは風当たりが強いけど、彼の実力を知ってる者（主に軍人）からは異論は出ない。
興味のないことについてはぶっきらぼうだけど、忠誠を誓ったジェイツ（王）相手には物腰も柔らかい。
ちなみにジェイツとは、オルガーが１７歳で軍入りした頃（つまりは１０年前）からの付き合いなので、失礼とは思いながらも弟のように感じてならない。

＜＜ジェイツ・モルラント＝スィーオルト…

亜栖弥がお世話になる国、スィーオルト国国王。
王位を継いだのが２０歳の時で、他の国の中でも一番早くに世代交代が行われた。
現在２３歳。
ちなみに、ジェイツが王として喋る時の言葉は、オルガー監督のもと練習してる言葉遣いだったり…。
本人も、王として若くて青いという自覚もあり、オルガーすすめの「なめられないため」の言葉遣いです。
ええ…まぁ…亜栖弥でさえ“似合わない”と思っている口調ですから、功を奏しているとは言い難いですよね…。
頑張れジェイツ！

←容姿←

・赤みがかった金髪（所謂ストロベリーブロンド）を肩辺りまで伸ばしている。
・色白の肌に儚げな容貌。線が薄い。
・大人になりきれない幼さが残っている。可愛くて綺麗。美形というには年若い？幼綺麗なイケメンくらい。

＜＜タリエン・ダルジー…

亜栖弥の部屋の警護を担当する、オルガー直属の部下。
何気に陛下と同い年な２３歳、空気の読める男。（たぶん。）
普段はお調子者で軽口バンバンなんだけど、根は真面目です。
幼少時の呼び名は“タール坊や”だったり。

←容姿←
・水色の髪を一片は短めに、片側は長めに伸ばしている。
・毛先の方をしゅっとさせた感じで肩につくかつかないかくらいの長さ。

＜＜アダラ・エマルシー…

タリエンが寝泊まりする鍛練場（ジル）で食堂のおばちゃん兼寮母さん的なことをしている。
豪快なおばちゃん。
フリルが好き。
とても３人の息子と娘（末っ子）がいるようには見えない。

＜＜サイニア・ウェルクス…

オルガー直属の部下で、現在は亜栖弥の部屋の警護を担当している２５歳。
その落ち着いた雰囲気とやさしげな風貌で亜栖弥からは“自分にもし兄がいたらこんな感じなんだろうか”と思わせるようなお兄さんキャラ。（でも一番〇〇い。）
彼のことを『サヴィー』と呼ぶのはタリエンだけ。
（その呼び方は女性っぽくとらえられてしまうので、他の人たちが彼のことをそう呼ぶことは絶対にありません。つまり、タリエンが勇者というか怖いもの知らずなだけというか…。）

＜＜リーゼリア・タクルス…

現在、日常の仕事もこなしながら亜栖弥の朝食と夕食の準備を担当している女中。
２２歳とお世話をする女中の中で一番亜栖弥と歳が近いため、亜栖弥的には親近感を抱いている。

＜＜ミリー…

現在、日常の仕事もこなしながら亜栖弥の昼食とお茶の準備を担当している女中。

＜＜レイシア…

現在、日常の仕事もこなしながら亜栖弥の部屋の掃除と湯浴みの準備を主に、身の回りのお世話を担当している女中。

第1話　これってあのう、夢ですよね？（前書き）

先々の展開は今のところ未定ですが、「一方通行バッチコイ☆」な態勢でいてもらえると安全です。

第1話　これってあのう、夢ですよね？

その日、今野亜栖弥（こんのあすみ）は月末の忙しさに、こんな時間まで残業をして帰ることになっていた。
ぎりぎりで終電に間に合った亜栖弥は、最寄駅で朝の7時から夜中の2時まで開いているコンビニに立ち寄り、夜食目当ての野菜スープと水、ついでに明日（休日）用にやけ食いするためのお菓子とその他目についた物を趣くままに購入する。
そんなこんなで2千円近くも買い込んだ袋を提げ、これでちょっとは今日の疲れも癒されるかなーと一人悦に入っている時だった。
コンビニを出て最初にある角を曲がったところで、亜栖弥は勢い良くスカッと足を踏み外した。
足元の状況を把握しようとする間もなく、重力に引っ張られるようにしてそのまま身体も落ちていく。
――…そう、落ちていくのだ。
道の途中、足を踏み外しただけで落ちるほどの下があるわけもないと思っていた亜栖弥は、その予想外の出来事に目を剥いたまま、あのジェットコースター特有の浮遊感を体感していた。
遊園地でそれに乗っても悲鳴を口の中で噛み殺してしまうタイプの彼女は、やはりこの落とし穴の中でも声を上げることはなかった。
彼女の混乱状態は別として…――――。

ああ、これはきっと、夢に違いない。
コンビニから帰っているように思えて、実はいつの間にか家に辿り着き、すでにベッドへダイブしていたのだ。
きっとそうだと無理やり状況を持っていこうとする亜栖弥は今、知らない人たちに囲まれていた。
手に槍のような物を持った、兵士らしき人物に。
なにこれ面倒くさいパターンきたーと思っている自分がいるあたり、亜栖弥も今の状況を薄々理解してはいるようだ。
それでも彼女の希望は夢オチ。
これに尽きる。

「何者だっ」

亜栖弥の目の前にいた男が、問いかける。
いや、これはもう、詰問だ。
ああ、“ただのしがない一、ＯＬですー”と正直に答えれば、速やかにこの輪の中から解放してくれるのだろうか。
果たして相手が希望する答えと持ち合わせが合っているのか限りなく自信のない亜栖弥は、他にどう言い繕おうと怪しい者には変わりないと何も言えずにいた。
それが男を余計に苛立たせたのか。

「――っ吐け！先程、この辺りで怪しい人物がうろついているとの報告があったのだ！何用でここにいる！！」

そう目の前の男が言うと、囲う槍を持つ兵士たちがそれに合わせて小さく一歩、踏み出した。
――本当に怪しい人物が、自分のことを敵情視察に来ましただとか襲うタイミングを見計らっていましただとか、相手が求めている答えを素直に吐くのだろうかと思う疑問は別にして、亜栖弥はますます危ない状況に陥っていることに頭が痛くなり出した。
長い長い落とし穴を体験して、ただでさえ精神的疲労も仕事帰りという肉体的疲労も半端ないというのに、この仕打ちか。
亜栖弥は、自分をこんな状況に追いやった人物を呪いたい気持ちになっていた。
とりあえず、そんなことをした犯人も思い浮かばず、辺りを見渡す。
見渡すと言っても、今現在兵士たちに囲まれている限り、周りの景色が垣間見えることはない。
亜栖弥はそこに、ここへ来て目覚めてから兵士たちが来るまでの僅かの時間で見えた景色を重ねていった。
どこかの御伽噺に出てくるような石造りの壁が広がる庭は、瑞々しい緑のにおいで立ち込めていた。
まだ早朝なのだろうか、何の音もしない静寂の中、見上げてみた白い壁はどうやら建物らしかった。
――お城のようだと思った印象は気のせいだと打ち消しておく。
甲冑が日の光をきらりと反射した輝きで我に返った亜栖弥は、現実逃避してみてもいいでしょうかと誰にともなく縋ってみる。
えー…と、これが私の夢ならば、願えば都合良く助けが入ってくれたりするのだろうか。
その願いは、ひとまずここから立ちされるというくらいには、希望通り叶うこととなった。

「何をしている？」

その男の一言は、ここにいる兵士すべてを直立不動にさせる効果を

持っていたようだ。
目の前に立つ男を筆頭に、槍を自分たちの胸元で構えるとともに高校の時にさせられたような軍隊の足踏みをし、新たに登場した男がいるだろうと思われる方向へ向き直る。
続けて発した声は、その表情と同じに怯えるような緊張で染まっていた。

「はっサイモス中将！只今怪しい人物を捕らえたところでありますっ！」

亜栖弥的には聞かない振りをしていたいところではあったが、軍隊特有の大きく通る声は、“聞こえませんでした”と自分に言い訳するには苦しいものがあった。
しかし、この人数の兵士に『中将』と呼ばれる人物まで登場する建物と言えば、もう亜栖弥には1つしか思い浮かばない。
ああ、それでもどこかに兵士十数名と中将をお抱えする貴族だっているはず、と希望を捨てきれないのは無駄な足掻きだろうか。
そんなことを思っていると、兵士たちで出来ていた人垣が割れ、亜栖弥の目の前に1人の人物が姿を現した。

他の兵士たちよりも頭1つ分は飛び出ている彼は、地面に膝を付いて座っている亜栖弥の位置からみると、ますますその威厳と迫力を増しているようにも見える。
女子どもには怯えられるタイプだろうと思った亜栖弥は、苦笑いが漏れるのを止めることができなかった。

第2話　位だけじゃなく態度まで偉そうでした。

王城の中は、どこもかしこも赤い絨毯が敷かれていた。
時々、廊下の所々に置かれている壺やお皿は品が良く、額縁に飾られた絵画とよくマッチしている。
夜食にと思っていたはずの野菜スープやお菓子が入っているコンビニ袋と仕事用鞄をぶら下げたまま、“中将”はこの王城内を闊歩していた。
亜栖弥はその男の後ろをついて歩く。
ヨーロッパ辺りのお城写真集にでも載っていそうな見た目からも思ってはいたけれど、案の定自分が今どこにいるのかさえもわからないほど迷宮な城内は、亜栖弥1人で出歩けば道に迷うこと間違いなしだ。
さすがの彼女も、「今から王の処へ連れていく」と言われてしまえば、この建物がただの建物ではないことを認めざるを得なかった。
こうなれば、最後の希望である“夢オチ”説はなにがなんでも諦めない。
決意も新たに、目の前を歩く中将の背について行く姿は、周りからどう映っていたのか。
時々出会う侍女のような人たちは目の前を歩く男に気付くと一様に隅によって通り過ぎるまで頭を下げ続け、十分に距離をとったのち傍にいた侍女中間と囁き合う。
その内容をわかっていて放置していた男は、1つの扉の前まで来ると、ようやくその歩みを止めた。

「おまえが庭にいたことは、すでに報告してある。中に入れば陛下と謁(まみえる)ことになるだろうが、今更逃げようだなんて思わないことだ。

おまえの変な服装も含めて、城中の者が知っている。」

変なとは失礼なっ。

亜栖弥は自分の格好を改めて見直した。

灰茶色のスーツに、シャーリングの入ったカットソー、足元にはつい最近買ったばかりのお気に入りパンプスを履いている。

どこからどう見ても、きちんとしたＯＬにしか見えない。

自分の世界では、結構イケてる格好なんだからね！と言おうとして、男がさっき言った言葉に引っかかりを覚えた。

――この人、いつの間に私の容姿まで報告していたの？

庭にいた時から一時たりとも離れたことのない亜栖弥は、男に王はおろか、城中の者へ連絡しているような素振りがなかったことを知っている。

王城の中を迷路のように歩いていたとは言え、囲っていた兵士のうちの誰かがこの国の王に報告していたのだとしても、城中の者に知れ渡るほどの時間をかけていたわけでもないのだ。

この情報の展開の早さは腑に落ちない。

そんなことを考えていた亜栖弥は、男に目を向けようとしてそこで初めて目の前の扉が視界に映る。

重厚そうなそれは、男の態度以上に尊大だった。

ただの扉であるはずなのにまるで威圧されているかのような視線を感じ、後退しそうになる自分がいた。

「わかっているとは思うが、正直に答えた方がおまえのためだぞ。」

どこまでも偉そうな男の態度に、亜栖弥の闘争心にスイッチが入る。

おーけー。

今野亜栖弥、２７歳。

だてに修羅場はくぐってないわ。

度胸だけはあんのよ私、と自分に喝を入れていると、男が静かに扉

に手を添えた。
暫くそのままの体勢でじっとしていた男は一瞬手を離すと、「入れ」と促した。
ああ本当に、どこまでも偉そうだ。
偉そうだけじゃなく、実際偉いというのもまた癇に障る。
そのまま扉を押し開けた男が前に歩み出すと、亜栖弥もそれに嫌々ながら倣う。
そうして男の足元ばかり見ていた亜栖弥は、目の前の歩みが止まったことに、ようやくその顔を上げた。

「そなたが報告に上がっていた女か？」

王様と言えば、赤い大きな椅子に座り王冠を被ったちょび髭のおじさん程度しか想像できない亜栖弥は、目の前で優雅に微笑む青年に驚きを感じていた。
床よりも2、3段高い位置に設置された椅子は、どんな素材でできているのか虹色に光るシャボン玉のような、真珠のような豪華な椅子で、それにゆったりと腰かけるのは赤みがかった綺麗な金髪を肩辺りまで伸ばしている、青年になったばかりの印象をもつ綺麗な男の子。
恐らく、亜栖弥よりも年下であろう彼は、にこりとしながら彼女のことを見下ろしていた。

「陛下、お忙しいところ、お時間をいただき申し訳ありません。」

そう言って膝を付いたのはあの男で、殊勝なその態度に、亜栖弥は薄ら寒いものを感じた。

「右にいるのが、例の怪しい人物です。見たところこの辺の服装ではないようですし、このような珍しい物を所持していました。」

そう言って男が掲げたのは、自分と一緒にこの夢の中、再現されていた手持ちの鞄とコンビニ袋だった。
王の“見せてみろ”という言葉に、王の手前で警護していた2人の兵士のうちの1人が、荷物を掲げる男の傍まで歩み寄る。
それに素直に手の中の物を差し出した男は、また深々と頭を下げた。
そうして兵士が取り出したのは、コンビニで買ったペットボトルの水で、それが視界に映った途端、亜栖弥は異様に喉が渇いていることを思い出した。
何故だかお腹も空いているような気がする亜栖弥は、必死に気のせいだと言い訳する。
これが自分の夢であれば、コンビニに寄った際に感じていた頃の空腹感よりもひどいものを、感じるわけがないのだから。

第3話　王様の肩書きは伊達じゃありません。（前書き）

評価＆お気に入り登録ありがとうございます＾＾
一昨日から始めた連載がすでに１，０００ＰＶ越えしていることに驚きです。
アクセスしてくれるすべての皆様に、感謝致します。

さて、今回はようやく亜栖弥が直接言葉を発します。
会話部分が多く、見辛い点が多々あるかと思いますが、ご容赦いただければ幸いです＞＜；

第3話　王様の肩書きは伊達じゃありません。

目の前の王が発した“広げてみろ”という言葉で、何処から持ってきたのかテーブルの上に晒すことになった荷物は、今や持ち主の手を離れてされたい放題だった。
その合間に突然、王の自己紹介が始まる。

「まだ名乗ってなかったな。私はこのスィーオルト国の王で、ジェイツ・モルラント＝スィーオルトだ。」

この流れはあれか、おまえも名乗れという無言の要求か。
そう思いながらも亜栖弥は、社会人として素直に名乗ることにした。

「今野亜栖弥です。こちら風で言えば、“今野”がファミリーネームで“亜栖弥”がファーストネームです。」
「あすみ……、言いにくいな。他に呼び方はないのか。」

笑顔で固まる亜栖弥に構わず、王――ジェイツは続けた。

「まあよいか。それにしても、あすみはどこから来たのだ？これらの珍しい物も、どこから手に入れた？」

そう言いながら椅子を降り、中身が拡げられているテーブルの傍まで来ると、１つの書類を手に取った。

「これらに共通して読めぬ文字が綴られているが、この世界――シニュウェルスは、どこの国も一応万国共通語を使用している。勿論、

そのどこにも、このような文字を使用している国はないと記憶しているんだが。」

――私の陳腐な想像力から成る夢にしては、よくできた舞台設定だ。シニュなんたらなんて世界、聞いたこともない。
ますます現実逃避したくなる気持ちは誰にも責められないはずだ、などと思いながら、亜栖弥は正直自分でもこの現状について、何が何やらわからないでいた。

「――正直、私にもよくわかりません。仕事帰りに落ちた落とし穴を通って、気が付いたらあの庭にいました。そこにある荷物はすべて、仕事の書類とコンビニで買った食べ物です。」
「――――…ほう？」

このまま曖昧に言葉を濁していても、彼らから怪しい人物だという印象を取り除くことはできないだろう。
同じ怪しい人物なら、“自分でもわけがわからない”と正直に伝えたうえで目の前の男に采配をゆだねた方がましだ。

「ではその書類というのがこれだな？――我が国を貶めようと、謀っているわけではあるまいな？」
「――…お言葉ですが、私のどこに、スパイになれる素質があるとでも…？」
「――――…ふっそれもそうだな…。」

その笑い方は、今までのように人を探ろうとする王としての仮面を被った笑い方ではなく、年相応の素顔を覗かせるようなものであった。
亜栖弥の隣にいる男から「陛下、」と注意されるくらいには、仮面も剥がれていたようだ。

うん、この雰囲気ならいけるかな？
亜栖弥は「あのう…」としおらしく声をかけてみた。

「――…さっきから思っていたんですけど…、」
「…なんだ？」
「……その喋り方、似合ってませんよ？」

そう言うと次第に目を丸くするジェイツは、呆れた風に息を吐いた。
けれどやっぱり、２０代駆け出しのその容貌に、４、５０代の王様が威厳たっぷりに使うような喋り方は似合わない。
あまつさえ、幼さの残るその顔は、大人と子供の危うさを感じさせる美貌なのだ。
あれだ、下向いてこの人の顔を見なければ違和感も感じなかったのかもしれないけど、初めから直接顔見ちゃってる場合には本当にどうしようもない。
なんてことを考えながら、亜栖弥はそう言えばこんな時、偉い人が許可してからじゃないと顔上げちゃいけないんじゃなかったっけ、とテレビの時代劇を思い出していた。
それこそ今更だ。

「――…これでも、私は王だからな。」
「大変ですね、王様も。」

王様が寂しそうに見えたので、亜栖弥は労いの言葉をかけた。
ちっとも厭味なんてこもってませんよ？
けれど、王様は含ませたものを感じ取ってしまったようだ。
空気がピリリと波打つのがわかる。

「――――…、わかっているのか、小娘？おまえの今後は、私が握っているのだぞ？」

「脅しですか？私としては、手厚く扱われずに、こっそり逃してくれることを希望します。それと、私小娘じゃありません。少なくとも、あなたより年上ですからね、王様？」

そこまで言うと、ジェイツを含めこの場にいる全員から（つまり、王様と警護の２人と横の男だ）、驚きの色が滲んだ。
あれ？それって、年上に見えないってこと？
ここは、侮られていることに怒るべき？
それとも若く見られて喜ぶべきなの？

「――…どこから突っ込めばいいのか…、あすみ、おまえはいくつになる？」
「２７です。」

そう亜栖弥が言えば、目の前の男が信じられないとでも言うようにあからさまに驚いた。
次いで、頭痛そうに米神のところを揉みだす。

「――…それが本当なら、そこにいるオルガー・サイモスと同じ年齢ということになるな。」

そこで初めて、亜栖弥は隣にいる男の名前（フルネーム）を知った。
お互い、名前すら名乗り合わずに今までここにいたのだ。
まあでも別にこのまま知らなくてもよかったんだけどと思いながら、亜栖弥はジェイツに問いかける。

「それで、他の突っ込みどころというのは？」

ジェイツは諦めたように口を開いた。

「――…手厚く扱わなくていいというのは、牢屋に入れられてもいいという解釈で良いんだな？」
「まあ。」
「何故そう希望する？普通は牢屋にだけは入れないでくれと懇願するのではないか？」
「…私のことは、城中の者が知っていると聞きました。“怪しい人物”として伝わっているのなら、牢屋以外の場所を宛がえば、王が直々に手厚く扱うほどの何かがあると勘繰る輩が出てくるのではないですか？それならいっそ、数日牢屋で過ごして頃合いを見計らってから逃げた方が、面倒なことにも巻き込まれないんじゃないかと。」
「……ほう、この城の牢屋から脱獄を謀ると？」

亜栖弥はにんまり、“やだなー”と返す。

「それはもちろん、こちらの人に手伝ってもらうに決まってるじゃないですかー。自分で言うのもなんですけど、私はここへ敵情スパイに来たわけでも誰かを狙って来たわけでもない、人畜無害な一般市民ですよ？長く留置したところでそちらにとって都合のいい事が出てくるわけでもないと思います。」

“それに…”と続けると、亜栖弥はジェイツを探るように伺い見た。

「この国の情勢なんて知りませんけど、お城中に怪しいと知れ渡っている私ってばあなたのことを快く思っていない人から見れば、暗殺の犯人に仕立て上げる絶好の人物になるんじゃないですか？――まあ、私が犯人になるはずがないとわかりきっているあなたでも、そうしておく方が都合が良いと言うんであれば、私はもう何も言えませんけど。」

言外に“私を留め置くことはあなたにとっても厄介事にしかならないんじゃないですか？”と伝える。
それを聞いたジェイツは、暫く考え事をしていたかと思うと、ニヤリと人の悪い笑みをその綺麗な顔に乗せて言った。

「そうか。なら、あすみにはこちらで部屋を用意しよう。私はこれらの荷に興味があるからな。また日を改めて、教えてくれ。それからオルガー、おまえは暫く遠征の予定もないんだ、彼女の護衛をしてくれるな？――これであすみに部屋を用意する名目と安全は保たれただろうか？」

ついでに、“コンビニ”とはなんだと続けたジェイツに、亜栖弥は項垂れるしかなかった。
交渉人気取りで結構うまく運べていると思っていただけに、その落胆は激しい。
やはり、年下といっても一国の王の肩書は伊達じゃないということか。
この男の気まぐれで、私はいつまで庇護される立場でいられるのだろうと、亜栖弥はこの先を不安に思った。

第4話　お茶のお時間です。

これが自分の夢ならば、こちらで寝てしまえば向こうの私が目覚めるかと期待してみた亜栖弥は、けれど目覚めた時に見えた天井が馬鹿高かったことに、肩を落とさずにはいられなかった。

この王城は前方・中央・後方にそれぞれ賓客を招く塔、王や臣下たちが執務を執る塔、王やここで働いている者の私室が並ぶ塔と分けられているらしく、亜栖弥に宛がわれた部屋は、賓客を招く塔と執務を行う塔の間に位置する所にあった。

一般的に、訪れる来訪者に宛がわれる塔とは離れ小島にある比較的小さめな塔の一室で寝起きをする亜栖弥は、遮光されていないカーテンから覗く太陽を見上げ、何度目になるかわからない溜息を吐いた。

あれからすでに2日を経過した3日目の朝、ジェイツからの呼び出しは未だない。

亜栖弥はそろそろと寝台（ベッド）から下りると、朝食が並べてあるテーブルの方は見ないようにして、クローゼットの中にあらかじめ用意されていた服を適当に見繕い、袖を通していく。

…さすがに今日は、少し動いただけでも眩暈を感じるようになっていた。

亜栖弥は、ここへ来てから今まで、水以外何も口にしていない。

ダイエットに挑戦しているのではなく、これは彼女のささやかな抵抗だった。

――こちらの物を口にして、もし“美味しい”と感じてしまえば、それは夢ではなくなるから。

この世界を“現実”として受け入れるには、まだ早すぎる。

亜栖弥には、ここで第2の人生を始めるつもりも、新しい関係を築いていくつもりもないのだ。
だから亜栖弥は、無駄な抵抗かもしれないとどこかでわかっていながら、受け入れたくなくて、食事をしようとしない。

「――…それでも、お腹はすくのよねぇ…。」

ぽそりと漏れる本音は、彼女の空腹感を切なく際立たせた。
寝間着にしていた服をベッドの上に置き、サイドテーブルに置きっぱなしにしている水差しからコップに注いでお水を飲む。
それで一息ついた亜栖弥は、寝室の扉から続く客室へと進みだした。

「――…どーも、」

そこにいたのはオルガーで、客室の入り口に背を向け立っていた。
午前中(あさ)はこの人か…と思いながら、亜栖弥は気落ちしそうになる気分を無理やり浮上させた。
ただでさえお腹すきすぎで滅入りそうだというのに、この仏頂面の男を相手にしないといけないなんて…。
この部屋の警護は、オルガーを含め彼が率いる部隊の中から3人程選抜し、4人で行っていた。
それを、午前中・午後・夜・夜間で警護に付くのだ。
彼に当たるのは今日で3回目になるが、今まで一度たりとも会話らしい会話をしたことがない。
他の3人は程度の違いはあれ、普通に挨拶くらいは返してくれるのだが…。
やっぱり、この人と一緒にいるのは苦手だなと思いながら、亜栖弥は彼に気付かれないように小さく溜息を吐いた。
なんとなくこの空気を変えたくて、近くにある出窓を少しだけ開けてみる。

そうしてみると、穏やかに吹き込んだ風が亜栖弥の髪を揺らして、少しだけ気分を変えることができた。
やさしい風のにおいがする…。
そう思いながらしばらくの間じっとその場に佇んでいると、入り口から静かにノックをする音が聞こえた。
オルガーは誰が来たのかわかっているように開けると、脇に寄り、恭しく礼をとる。
そこには、2日間音沙汰のなかった王がいた。
ジェイツはにこりと微笑(わら)うと、亜栖弥に向かって言葉を発した。

「しばらく構えなくて悪かった。急ぎの仕事を片付けてきたから、ゆっくり、お茶にでもしよう。」

その言葉遣いは年相応のもので、亜栖弥は目をぱちぱちとさせながら不思議そうにその言動を見ていた。
それに気付いたジェイツは溜息を吐きながら白状する。

「この前あれだけ言われたのに、またキミの前で王様ぶったところで今更だろう？」

“似合わない”と言ったことを気にしていたのだろうか。
亜栖弥は悪いことしたなぁと思いながらも、素直に改めるジェイツの心根が可愛くて、嬉しそうにふふっと笑みを漏らした。

第5話　王様は少々強引でした。

亜栖弥とジェイツは、一緒のソファに座ったまま、目の前で用意されていく様子を眺めていた。
亜栖弥に与えられた部屋の客室でテキパキと自分の仕事をこなしていく侍女は、他のことは何も見えてませんという態でお茶の準備を行う。
ピンクというよりもオレンジ色で描かれた花が万遍なく散ったテーブルクロスは、端の方がレースで編まれていた。
その上から更に細かいレースで編まれたクロスを這わせる。
そこに控えめな花瓶に活けられたあまり匂いの強くない花を置き、サンドイッチや果物、クッキーやケーキなどの摘まめるものも用意されていく。
ほかほかといい匂いのしているティーポットに綺麗に磨き上げられたティーセットがテーブルを満たす。
あっという間にお茶の時間の完成だ。
しかし、亜栖弥は内心困っていた。
ここまで準備させてしまった後に“食べたくありません”というのも言いづらい。
けれど、こんなところで自分の心情を曲げるわけにもいかない。
そんな迷いを見透かすように、ジェイツは侍女が静かに紅茶を注いでいる姿を見ながら言った。

「キミがこれまで、一切物を口にしようとしないことは聞いてるよ。でもそれにしたって、身体は限界を感じてきてるんじゃない？」

ジェイツがちらりと亜栖弥の方を見ながら続ける。

「何か、食べたくない訳でもあるの？」
「――――…」
「こんなに美味しいのに、食べないなんてもったいない。」
ジェイツが目の前に用意されたミルクで割ったような紅茶を啜る。
亜栖弥だって、ここの料理がまずそうだなんて思っていない。
それでも、素直に理由を言ったところで理解してもらえるとも思わない。
「毒や変な薬だって入ってないんだから。」
そう言って次々と果物やクッキーを口に入れていくジェイツに、それを証明したくて軽食まで用意してくれたのかと思いいたる。
「――…、そんなこと、私だって思ってないですよ…。」
“じゃあなんで？”と目で問いかけてくるジェイツに、どう言えばうまく伝わるのかわからず、曖昧なまま口が動く。
「――――…食べてしまえば、私の世界が変わってしまうから…、」
そうは言っても、目の前に美味しそうな物を用意されれば、自分の意に反して無情にもお腹だけはますますすいていく。
亜栖弥が切なさでいっぱいになりかけた時、“あーん”という言葉とともに、目の前に果物を刺したフォークを持つ手が現れた。
呆然とする亜栖弥に構わず、ほらほらと手を動かすジェイツはわかっているのかいないのか。
「そうは言っても、食べなきゃ生きていけないでしょ？ほら、大丈

夫。世界が変わっても、僕らがここにいることは変わらないから。
この果物、すごく甘いんだよ？」

目と鼻の先で甘そうな匂いを放つそれに抗えず、とうとうゆっくりと口を開けていく亜栖弥を見たジェイツは、嬉しそうにフォークを口の中に差し入れた。

「――――…っ本当だ…甘い……、」

ジェイツは、彼女が泣くのではないかと思った。
堪(こら)えるように何かに耐える亜栖弥は、その実、泣いていたのかもしれない。
食べなければ倒れてしまうとわかっていても食べることを恐れていた反面、空腹を感じることも“ここで生きている”のだという現実をつきつけられることだった。
ただ、自分が、それでも受け入れようとしなかっただけ。
とんでもなくしみったれそうになった亜栖弥を止めたのは、ジェイツの一言だった。

「あすみは化粧してないと、ますます僕より年上だって感じしないよね。本当は年下なんじゃない？」

――――――…。

え、ちょっと、ここはさー、頭撫でるくらいするでしょ？
あれー、何この場面で普通そんなこと言っちゃう？
えーとかなんとか亜栖弥が心の中で思っていると、それが顔に出ていたのかジェイツがくすっと笑った。

「ほら、もっといろいろ食べなよ。どれも全部、美味しいんだから。」

その笑顔に、まっいっかと思った亜栖弥は、ジェイツに勧められるまま次々とサンドイッチやデザート類を食して行くのだった。

第6話　私の知らないところで何かが起きたようです。

「へー、亜栖弥ちゃん食べるようになったんだー。」

亜栖弥の目の前でスツールを持ってきて座っているのは、オルガー・サイモス直属の部下で、亜栖弥の部屋の警護を担当する男。
タリエン・ダルジー、通称ダンは軽そうな口調のお調子者だった。

ノックと同時に「司令かーん、そろそろ交代の時間ですよー。」と言って入ってきたのはつい先程で、ノックと同時に入ってきたんじゃ意味ないだろうと脳内突っ込みを入れたのも記憶に新しい。
この男は、この2日の間もこんな調子で現れては、亜栖弥を疲れさせていた。
この男の話はスルーするに限る、そう学んだ亜栖弥は現在その悟りを発揮中であった。

「ちょっとー、いくらなんでも無視はないでしょ？」

ジェイツはジェイツで、この男を見かける所と言えば今まで彼が“王様”として面している場所のみでしかなく、その時の生真面目そうな雰囲気と目の前の彼とのギャップに、酷く驚いていた。
人は見かけによらないということだろうか。
この部屋でジェイツの姿を見つけたタリエンは、初めこそ直立不動で固まってしまったと思っていたのに、その驚きを過ぎればすぐにジェイツに同席していいかと聞くや否やこの部屋にあったスツールを隅から持ってきたのだ。
そして冒頭のセリフである。

亜栖弥とて、自分が食事を一切取らなかったことをこの男がそれなりに気にかけてくれていたことは知っていた。
…それなら、一言でも詫びておくのが礼儀か。

「――…その節は、ご心配をお掛けしました。」

亜栖弥からそんなことを言われるとは思っていなかったのか、言われた本人はおよよ？と目をぱちぱちさせる。
それからふーんと考えるように言うと、にやりと悪戯を思いついた悪ガキのような顔をした。
目を逸らしながら言葉を発した亜栖弥は、自分の頬に添えられる誰かの熱に、一瞬何が起きたのか理解が遅れる。
伸びてきた腕から根元へと辿っていくと、その腕はどうやらタリエンのものらしく。
位置的に考えてもそうだろうなーと現実逃避に走ろうとしていた亜栖弥の思考を邪魔するべくか、タリエンが口を開いた。

「どうせもらうなら、言葉より態度がいいな。」

語尾にハートマークが見えたのは気のせいだ。
断じて気のせいだ！
それよりタリエン、おまえ仕事の方はどうなってるんだ！
おまえの仕事はこの部屋の警護だろう！
私の目の前にいて仕事がこなせると思っているのか！

「やだな、僕の仕事は亜栖弥ちゃんを守ることだよ？これでもかってくらい仕事出来てるでしょ？」

奴はエスパーだったようですｏｒｚ
ああああどうしよう、奴に殺意が芽生えるのは私の我慢が足りないだ

けですか？
それでも亜栖弥は、（自分基準の）比較的穏やかな表情を崩さず、穏便に運ぼうと努力した。
「――…ダンさん、あなたは私の傍に張り付いていなきゃ」
警護ができないような軟弱な男だったんですかと言おうとしてその手間が省けた。
急にタリエンが何かに脅えるように直立不動になったのである。
（ちなみに本日2回目だ。）
訝しげな視線を送る亜栖弥に、タリエンは空笑（から）いで答えた。
「――…ハハッ、司令官に睨まれた…。」
そうか、タリエンはあの男（オルガー）に睨まれると蛙になるのかいいことを聞いたと思うと同時に、亜栖弥はどこにあの男がいるのかと思わず辺りを見渡した。
確かにタリエンが来たのと入れ替わりでこの部屋を出て行ったはずなのに。
そんな亜栖弥を見ていたジェイツが――タリエンが来てからその影を薄くしていた彼が――ここへきてようやくまたその口を開いた。
「ここにオルガーがいるわけではない。彼のことだ、風を使って送ったんだろう。」
「…風を使う？」
亜栖弥の中で、“睨まれた”ことと“風で送った”ことは繋がらない。
それでもタリエンからそのことを肯定する雰囲気が返れば、亜栖弥は1人取り残された気分になった。

ジェイツはそんな亜栖弥の態度を不思議そうに見ている。
人の視線を風で送ることが常識の範囲ではなくても、この世界で生活していれば、“風を使う”ということはいくらでも身近にあるはずだ。
現れる力の差はあれど、それほどこの世界では自然の力を傍で感じることは日常的だ。
タリエンが表情を変えずに怪しんでいるのを目で制し、ジェイツは亜栖弥に説明を始めた。

第7話　世間の常識でしたかすいません。（前書き）

会話やその他所々に修正を加えてます。（11．4．15）

第7話　世間の常識でしたかすいません。

このことを知らないとなると、どうせこの世界のことも知らないのであろう？ついでだ、教えてやろう。と切り出したジェイツの話に、亜栖弥はその間中、呆然としていた。

「この世界“シニュウェルス”は、シニュレイスとウェルセイユ２人の神が創りし世界で、基本４国から成り立っている。まあ覚える必要はないかと思うが、４国の名は我が国スィーオルトを含めて、それぞれ『シレスタ』『ニュージェンカ』『ウェルリオール』だ。これら４国が合わさって菱形の形をしているという。――そんなシニュウェルスには、子どもがこの世に誕生した際、均しく精霊の祝福を授かると言われている。そのために、この世界の者たちは、身近に精霊の使役である妖精を感じることができるのだ。うまく妖精たちに好かれれば、好意の程度とその者の潜在能力によって、小さな火を起こすことから雨を降らせたりすることができる。まあ、一般的に特別な訓練を受けていない者は、人より走ることが速かったり料理に長けていたりと些細なことにしか現れず、更に学のない者はそういったことが妖精によるものだと知ることもないだろうがな。逆に特別な訓練を受けそれぞれの分野で突出した能力を身につけることができた者を、『風の使い手』のように、使い手と呼んでいる。――中でも、妖精に愛され、精霊の恩恵を受けた者は、その力を自由自在に操ることができるのは勿論、一切傷を付けることができないところから、『護り手』として分類されている。そして、オルガー・サイモスは『風の護り手』として存在していてな。オルガー直属で率いる部隊は、そこにいるタリエンを含め、皆『風の使い手』で構成されている。」

だからオルガーにかかれば、視線や気を風に乗せて運ばせるくらい朝飯前のことなんだ。と締めくくったジェイツは、亜栖弥からの反応を待った。
ようやく言葉を発したと思えば確信めいた亜栖弥の問いかけに、ジェイツは内心ニヤリと笑う。

「――…それで、字も読め仕事をしていると言った“学のあるはずの私”がそれを知らないことに、『何処』から来たと怪しんでいるってわけですか？」
「話が早い。」

ジェイツの試しているような、どんな些細なことも逃さないと探る視線は、彼が完全に、“王様”として今、亜栖弥の前にいることを語っている。
なんだかこの答によって自分の運命が決まりそうな気がするわーと思ったものの、亜栖弥は意気込んでもしょうがないと切り捨てた。

「――…最初に言ったはずですよね、私にもよくわからないと。それでも、今の話を聞く限り、間違っても私の世界に“シニュウェルス”なんていう世界も妖精を使って自然を操るような技も、ないのだけは確かです。…だから、ここは私の知っている世界じゃない、ということだけはわかりました。」
「――…ほう。」
「そうとなれば私は、元の世界に戻るための方法を見つけなくちゃいけません。――だから、かっさらったままの私の荷物、とっとと返してください。」
亜栖弥が勢いをつけてそう言うと、ジェイツは詰めていた溜息を吐いた。

「そうだな、持ってこさせよう。あれらの荷に怪しい物がないか、一応調べさせてもらったぞ。」
「構いません。」
というか、事後報告なところが今更ですけどね？
なんてことをやっていると、間を開けずに扉をノックする音が聞こえた。
ジェイツが「入れ」と言ってやってきたのは手に荷物を提げたあの男で…。
「この行動の早さも、風によるものと？」
そう聞くと、ジェイツが「ああ」と答えた。
「オルガーとは私が王になる前から付き合いがあってな。合間を縫って、風の使いに関する訓練をつけてもらっていた。そのお陰で、意思疎通くらいは図れる。」
じゃあやっぱり、最初にオルガーに捕まった時、私のことを城中の者が知っていると言ったのも、彼が風を使って伝達していたってことなんだろう。
ジェイツがここへ来た時、来訪者が誰か初めからわかっていたという風に扉を開けた時も、風を使っていたのか…。
「オルガー、その荷をこちらへ。」
そう言って手を差し出したジェイツに荷物を預けたオルガーは、恭しく礼をするとこの部屋から出て行った。
ジェイツが亜栖弥の方へ振り返りコンビニ袋と鞄を渡すと、亜栖弥は鞄の中から書類を取りだした。

内容を確認しながら「よかったーそろってて、」とこぼす。
そうしてまたジェイツと目線を合わせると、亜栖弥は言いづらそうに切り出した。

「あのう…、この世界に、ハサミとノリはあるんでしょうか…？」
「ハサミは針子たちが持っているだろう。ノリとはどんなものだ？」
「ええと、この書類をハサミで切って、別の紙にそのノリで張り付けたいんです。」

伺うように亜栖弥がジェイツを見ると、ジェイツはふむと考えるように一息ついた。

「わかった。両方こちらでそろえてみよう。また届けさせるがそれでよいな？」
「はいっ」

よかったーこれでこっちでもプレゼンの資料作りができる！
実際の資料はパワーポイントで作らなきゃいけないけど、少しでもやれることがあるならこっちにいる間に作ってやる！
などと意気込んでいる亜栖弥は、興味深そうに彼女のことを見やる視線には気付かなかった。

第8話　食べることはストレスの発散です。

「ところで、そちらの袋に入っている物は、ほとんどが食べ物のようだが…？」

「ああ……――ほとんどっていうか、全部？」

ジェイツがコンビニ袋を目で示して問いかける。

それに対して“休日のやけ食い用として買ったんでー”と説明した亜栖弥に、それでも買いすぎだろうと思ったのはジェイツだけではなかった。

そんな男どもの心情には気付かず、亜栖弥はコンビニ袋の中に入っていたものを1つ1つ説明しながら取り出していった。

「これは残業帰りの夜食にと思って買った野菜スープなんですけど…、賞味期限切れてるだろうなぁ…。こっちは私の世界でお菓子界の代表格とも呼べるポテトチップスで、塩味が病みつきになる美味しさなんですよ？他にもコンソメ味とかバーベキュー味とか類似品もいろいろあって、そっちにも手を出しちゃうんですけど、やっぱり最終的にはこれに落ち着く的な。それから、これとこれとこれはどれもチョコレート菓子です。あっまいです。それとこっちはじゃがいもとかの野菜を原料とした軽いスナックです。さくさくいけちゃいます。後は…お酒のおつまみにするつもりだったチーズとかビーフジャーキーとかいりこ？それから最後にお水です。」

膝の上やソファの上、目の前のテーブルの空いたスペースに並べていった亜栖弥は、それらを満足気に見下ろした。

我ながら、よく買ったものだと思う。

目の前のお菓子は、それぞれすでに開封してあるようで、ゴムのような物で留めてあった。
一度開けてしまうとそうもつものでもないため、徐々に食べていかなくてはいけないだろう。
亜栖弥は、何の気なしに問いかけた。

「王様も食べますか？」

その一言に反応したのはタリエンだった。
タリエンが剣の柄に手を伸ばして構えるような格好になったことに、亜栖弥は何事かと驚いた。

「よい、タリエン。」

ジェイツの言ったその一言で構えを解いたタリエンは、戸惑う。
そこで初めて、亜栖弥は自分の言った言葉の意味を理解した。
ジェイツは、“怪しい物がないか調べさせてもらった”と言ったけれど、この世界とあちらの世界に存在する成分が同一であるとは限らない。
一応危険な物はなかったとして私に返してくれたのだろうけど、存在する成分が異なるのであればその結果も不確かになってくる。
私はジェイツに毒を盛ろうなんて考えてもいないけど、知らない間に、利用されることもあるのだ。
自分で“私を利用してあなたを殺そうとする輩が出てくるかも”と言っておいて、気軽に食べ物をあげようとするなんて、どうかしていた。

「ごめんなさい、やっぱり今のはなかったことに…、」
「よいのだ、あすみ。調べさせてもらったと言ったであろう。そなたの世界の物とこちらの世界の成分は、どうやら似ているようだ。

まったく同じ物はなかったらしいが、とりたてて怪しい物も出てこなかったと報告を受けている。分析が済んでからはこれらを利用されぬよう、厳重な守りを敷いていたからな。こちらの者が何か手を加える隙はなかったはずだ。…まあ、城の分析班が何かしていれば別だがな。」

にやりと笑って「それに」と続けたジェイツは、安心させるように亜栖弥に向かって微笑んだ。

「根拠はないが、個人的にはあすみが私を害することはないと思っているしな。」

この世界で自分を織り成す基盤が何もない亜栖弥にとって、信頼してもらえるというのは想像以上に嬉しいことだった。
胸の奥がじんとなるのを無理やり抑えて、亜栖弥は精一杯の笑顔を浮かべる。

「――…ありがとう。」

それでも、これから不用意に物を渡さない方がいいだろうなと思う亜栖弥であった。

豪華さはないが質の良い調度品で設(しつら)えられている部屋は、今や甘ったるい匂いで充満していた。

その発信元であるチョコレートのお菓子を食べながら、亜栖弥はそういえばと思ったことを聞いてみた。

「私がここの部屋を用意してもらった名目って、王様に持ってた荷物の説明をすることだったじゃないですか？」

「ああ。」

ジェイツは、某三角錐の上がピンクで下が茶色なチョコレートを食べながら頷く。

「――…もうそれを済ましちゃった今、私ってばこれからどうなっちゃうんでしょうか？」

この世界にも戸籍という概念があるかどうかはわからないけれど、身ひとつで放り出された場合、非常に困ることになるんでは…と危惧する。

せめて家や仕事先紹介してくれないかなと亜栖弥が思っていると、しばし考えている風だったジェイツが口を開いた。

「確かにそうだな。だが、対外的には、亜栖弥は一応私の友人として城にいることになっているしな。今すぐどうこうなるということはないだろう。――…しかし、いつ界を渡れるか知れんとなると、やはり戸籍はあった方がよいか…。」

と考え込むように呟いたジェイツは、淹れなおした紅茶を口に含んだ。

亜栖弥はジェイツの一言に、目を落とす。

そうなのだ。

私はどうすれば、元の世界へ戻ることができるのか。

どうして穴に落ちたのが“私”だったんだろう。

――今思うと、気分のようなものでひょっこり“あの時”“あの場所”に現れていたような気もする。
私が道のどこを通って角を曲がるかなんて、普通わかるものじゃない。
穴の大きさだって、落ちた後に上を見上げて見た時には、人が1人通れるかどうかくらいの幅しか開いていなかった。
あの穴自体が移動するのでもなければ、ピンポイントで落ちるというのも…。
亜栖弥の思考は、ジェイツがカップをソーサーに戻す音で引き戻された。

「いずれにしても、あすみの今後はこちらでも考えておこう。それまではこちらに留まってもらうことになるが、城の中を歩きたい時には護衛を付けて行ってくれ。さて、そろそろ私は仕事に戻ろう。――今日は、楽しかった。」

“テーブルの上は後で片付けの侍女を寄越そう”と言って去っていくジェイツの後ろ姿を見ながら、亜栖弥は自分の存在がジェイツの仕事を増やさせていることに、今更ながら気付くのだった。

第9話　いいえ私には彼の背中に尻尾が見えます。

ジェイツが去った部屋で、亜栖弥はこれからの予定を考えていた。
プレゼンの資料を作るうえで必要な材料は今や亜栖弥の手中にある。
構成の流れも亜栖弥の頭の中に入ってはいるが、しかし亜栖弥がしたいのはそこから先のことだ。
やはり、やるなら手元にはさみがある状態でないと…と結論づけた亜栖弥は、それならジェイツが言っていたお城探索でもしてこようかと考える。
――正直、ここでの生活は今まで本当に何もすることがなくて、暇を持て余していたのだ。
窓からは、建物の横に森のようなものが広がっていることが確認できた。
きっとこの城は自然が多いのだろうと予測をつけた亜栖弥は、外に出て新鮮な空気を肺いっぱいに吸いながら日の光を浴びたいものだと思っていた。
――――…けれど、

「外に行きたい？」

亜栖弥は自分の思考に沈みすぎて、この場にタリエンが残っていたことを忘れていた。
午後の時間一杯はタリエンが警護をすることになっているのだから、当然と言えば当然なのだが…。
“外に行きたい”と考えていたことを顔に出していたんだとしたら、そんな自分にがっかりだ。
意外と目敏いタリエンに、亜栖弥はやりにくさを感じていた。

「陛下の許可も下りたことだし、行ってみればいいんじゃない？」
「――――…それでも、見かけない女が護衛を付けて歩いていれば、それが“陛下の友人”として城に滞在している者だと分かる人には分かるんじゃないですか…？私は、できればそうやって近づいてくる人とは関わり合いをもちたくないんです。」
「…そういう者たちに、会わなければいいんでしょう？」

そう言うと、タリエンは一瞬考え込むように口を閉ざした。

「ようは、そいつ等が立ち寄らないような場所を選べばいいんだ。それでいいんなら、僕が案内してあげてもいいよ？」

にっこりと問いかけるタリエンに従いたくない気持ちはあれど、ここはこの城のことをよく知っているだろう目の前の人物に案内してもらった方が事なきを得るだろう。
それでも、自分とジェイツがさっき話していた会話をこの人も聞いていたんだと思うと、関わってもいいものかどうか悩む。
…タリエンに、スルースキルがあることを祈るばかりだ。

タリエンについて後ろを歩いていた亜栖弥は、久々に感じる自然の空気にご満悦だった。
向こうの世界でも、自然といえば家から歩いて1時間程度かかる場所にピクニックができるような広めの公園があったくらいで、亜栖弥にとって自然はあまり身近なものとは言いがたかった。
排気ガスが漂う一方の空気を吸い込み、平日はほぼ家に帰ったらご飯を食べて寝るだけのような生活を過ごしていた亜栖弥は、この世

界に来て久々に感じる緑の匂いに、今まで溜め込んでいた淀んだ空気で一杯の肺の中をすべて入れ替えるかのように、深呼吸を繰り返す。
その様子を亜栖弥に気付かれないよう見ていたタリエンは、自分でも気が付かないうちに頬を緩ませていた。

亜栖弥たちは今、与えられた部屋があった塔のすぐ傍にある森の中を、深すぎず浅すぎず突き進んでいるところだ。
開花の時期ではないのだろう、見渡す限り緑しかないこの場所は、それでもきらきらと受ける木漏れ日に次々と表情を変えていくその様が、素直に綺麗だと思える。
そよそよと吹きぬける風が与える静寂に、外の世界とは流れている時が違うんじゃないかと思わせる程、ここの自然は亜栖弥の中に深く、印象を残す。
見たことのない青い小鳥が空を舞い、時折亜栖弥の周りを旋回していっては、そんな自然に、亜栖弥は僅かな時間で安らぎを覚えていた。

「こっちだよ。」

ふと、今まで無言だったタリエンの声が少し離れたところから聞こえた。
周りの様子ばかりに夢中になっていた亜栖弥は、タリエンのことが意識から抜けていたようだ。
１０ｍほど離れた所で立ち止っているタリエンに謝りながら小走りで駆け寄ると、射し込む日差しに目を奪われた。
タリエンが居た場所は、どうやら木々の終わりだったようだ。
そうして一瞬視界を庇った亜栖弥が次に見たのは、無機質な建物と広々とした砂地が広がる光景だった。

「ここは…？」

ほとんど無意識に呟いたその声は、亜栖弥の後ろにいたタリエンが答える。

「僕たちが寝泊まりしてる、鍛練場（ジル）だよ。」

ここの食堂はご飯がすごくおいしいんだと続けたタリエンは、そのまま足を建物に向かって進めだした。

学校の運動場と校舎の関係のように広がるその景色の向こうにちらほらと見える人たちは、誰もががっしりとした体躯に“この世界には背の低い男性はいません”とでもいいたそうな高身長を併せ持っているようだった。

そんな彼らに視線を向けていた亜栖弥は、目の前を歩くタリエンにそれを戻す。

軟派な奴だと思っていたが、タリエンもひ弱ッ子というわけではないようだ。

１８０あるかないかの身長にがっちりとした肩幅から伸びる腕はほどほどに筋肉がついており、胸板も厚い。

少々伸びすぎの感がある長めの髪がふわふわと揺れる様は、こうして見るとその体には不釣り合いなような気もする。

…もっと清潔感のある短めの髪だったらましに見えたのだろうか。

そんなことを思いながらタリエンの後をついて行く亜栖弥は、下方に続く階段を前に立ち止まる。

すでに下りはじめていたタリエンはそんな亜栖弥に気付いたのか、振り返って声をかけた。

「どうしたの？」

不思議そうに立ち止ったこちらを見るタリエンに、亜栖弥は内心冷

や汗が出るのを止められない。
――…っなんだこの階段は！
高所恐怖症の気（↑認めない）がある亜栖弥にとって、手摺もない急斜面でできている幅広な階段は、できれば生涯利用したくない代物だった。
どうして上から下までがこんなに遠いのか。
どうして急斜面にもかかわらず足を乗せる場所がこんなに狭いのか。
――――…っどうして建物の入り口へと続く道に下りるのに、この手段しかないのー！？
亜栖弥は、自分の世界がくらりと傾きそうになるのを必死で堪えた。

「亜栖弥ちゃん？」

そんな自分の思考ばかりに陥っていたために、タリエンが移動していたことに気付かなかった。
目の前で上がった声の近さにびくりと驚いた亜栖弥は、ゆっくりと伏せていた目を上げる。
未だ一歩も階段を下りられていない亜栖弥に対し、タリエンはその一歩手前で亜栖弥の様子を伺うように顔を覗いていた。

「あ…、」

高い所が怖いなんて言えるほど、自分はもう、可愛げのある歳じゃない。
２７歳の社会人なんて性質が悪いだけだ。
亜栖弥は今もどくどくと音を立てる心臓をごまかすように無理やり笑顔を見せると、「なんでもない、大丈夫。」とタリエンに返した。
そんな亜栖弥をじっと見つめるタリエンは、しょうがないなーと言いながら徐に手を差し出す。
そうして目の前にやられた掌を見つめながらなんだと頭を傾げる亜

栖弥に答えたのは、訳知り顔で自分を見返すタリエンだった。

「僕の手でよければ、只今絶賛貸し出し中だけど？」

あれ、まさかこれって貸し1としてカウントされちゃう？なんて思ったものの、背に腹は代えられないのが現実。

こんな手でも縋れるものがあるのなら縋ってしまった方がいいと頭では理解しつつ、しかし亜栖弥の性格からして素直に応えるのは癪に障る。

その結果、口から出たのはこんな言葉だった。

「――…なんのことだか知らないけど、そんなに言うなら借りてあげてもいいわよ？」

視線を逸らしながら言った言葉に、亜栖弥自身も今のはまずかったと後悔を感じていた。

せっかく好意（？）で助けてくれるというのに、この返しはあんまりだ。

我ながら本当に可愛げがない。

いや、２７歳の女に可愛げを求められても困るんだけど。

なんてことを思いながら内心ぐるぐるしていると、急な浮遊感が亜栖弥を襲った。

「よいしょっと。」

目の前に迫ったタリエンの顔は、まっすぐに前を見据えて。

一歩一歩気遣いながらゆっくりと階段を下りていくタリエンにされているのは、俗にいう“お姫様抱っこ”だった。

その状況を把握した途端顔に集まる熱に、亜栖弥は酷くうろたえた。

「え、あ、ちょ…っ！おおろっ！お降ろしてよっ！」
「あーはいはい、静かにしてよーねー。」
落としちゃうよーと続けるタリエンに尻尾が生えていないことが残念だ。
こんな急斜面で一段一段の高さもあって足場も狭い所で暴れだすわけにはいかない。
いかないとわかってはいるのだけれど、確信犯的なタリエンの行動には文句を言う権利があるはずだ！と勇む。
こうなればできるだけ奴に近づかないようにしようと腕を突っ張ってみても限界があるわけで…。

「……本当に落としちゃうよ？」
「ぎゃっ！」

最近経験したばかりのあの浮遊感が亜栖弥を襲った。
咄嗟に目の前のものに手を回してしまったのは人間（ヒト）の正常な心理だ、と弁解しながら亜栖弥は意地の悪いタリエンの行動を睨みつけてやらずにはいられなかった。
イタイケな女性をおちょくるなんて性質が悪いぞ！
おまえは何処の悪魔だ！
自分の言動を棚に上げて不満を（心の中で）垂れ流す亜栖弥に、タリエンは何事もなかったかのように亜栖弥を抱え直し階段を下りながら言葉をかけた。

「こんな時は、素直になった方がいいんだよ？」

――素直にならないからこんなことになってるんだからね？という含みを正確に受け取った亜栖弥は、この男どうしてくれよう、というやり場のない怒りに肩を震わせ、とりあえず首絞めとけと回した

腕に一層力を込めた。
亜栖弥のそんな行動を意に介したふうもなく、役得だなと思っていることなんて、タリエンしか知らない。

第１０話　お仕置きが欲しいんですね、わかります。

食堂までお姫様抱っこのまま運ばれそうになった亜栖弥は、タリエンの腕の中で暴れたが、そんな亜栖弥の抵抗などものともしないタリエンは構わず歩き続ける。
実際、タリエンにがっちりと抑えられていた亜栖弥ができた抵抗など、高が知れていた。

「ちょっ、降ろして！降ろしなさいよ！」

亜栖弥は自分の顔が真っ赤になっていくのを感じていた。
――居たたまれなさすぎる。
そんな亜栖弥は、自分の目が潤んでいることに気付かない。
それを至近距離で見ていたタリエンは、悪戯心がムクムクと刺激されていた。
良い顔で泣くなーと思っていることを亜栖弥に知られるわけにはいかない。
知られた時の反応も面白そうだが、きっと無自覚だろう今の亜栖弥の顔をもっと見てみたいと思う気持ちの方が強かった。
今タリエンの背後を窺えば、その性格を現すような黒々とした尻尾が揺れていることを確認できただろう。
抵抗することに必死な亜栖弥は、そんな彼の様子にまったく気付くことはなかった。
さて、どうやっておちょくろうかなーとタリエンが考えている時、階段に面していた食堂の裏口から1人の女性が現れる。
ゴミ袋を抱えて出てきた彼女は、タリエンを見つけるとおや…と立ち止り、こちらを窺うようにじっと見つめてきた。

…うーん、不発？と思ったタリエンも立ち止まる。
腕の中では相変わらず亜栖弥が暴れていた。

「離してよー！」

新たに現れた女性の存在に気付いていない亜栖弥は、必死に自分との距離をあけようとタリエンの胸に手を押しつけて叫んでいた。
そんな亜栖弥に視線を戻したタリエンは、こんな状況だが湧いた悪戯心に素直に手を離すことにする。

「ぎゃっ！」

本日2度目の急落下にまたしがみつくことになった亜栖弥は、心底恨みがましくタリエンを睨む。
あれ、私ってばタリエンよりも年上だったよね？
なんか完全におちょくられてるような気がするのはきっと私の気の所為だよね！絶対！
と自分に言い聞かせながらタリエンに悪態を吐くことも忘れない。

「鬼！悪魔！変態！」

そんな子供染みた亜栖弥の言葉にタリエンは思わず噴き出してしまうが、笑われた亜栖弥は益々怒りがヒートアップした。
実際、今自分が言った言葉の内容が子どもっぽすぎたことは認めよう。
しかし、それとこれとは別だ！
タリエン！覚悟！
亜栖弥はタリエンの首に巻き付く腕を渾身の力で締め上げるように強めた。
そこ、勢い込んで結局これかいとか言わない！

こんな態勢じゃできる反撃も少ないのだよ？

「…亜栖弥ちゃん。」

タリエンが放つ言葉に苦しさのようなものは微塵も感じられない。
…あれ、もしやまったく効いてない？
それどころか、どこか余裕さえ感じる態度で芝居がかった風に発した一言は、絶対にこの状況を楽しんでいた。

「あのね亜栖弥ちゃん、実はさっきからそこに食堂のおばちゃんが…。」

「何故早くそれを言わないっ！！」

それを聞いた亜栖弥は、即効で無理やりタリエンの腕の中から飛び出ると、１m先へと着地した。
タリエンの拘束が緩んだとはいえ、素早い動きと見事な着地に１０点と評価付けながら素早く立ち上がり振り向いた。
その先にいた女性を目にするや否や、カチンと音を立てて固まってしまったのは仕方がなかったと弁解しておこう。
思わずタリエンの方に顔を戻し問いかけるように奴を見つめてみるが、読めない笑顔を返される。
どういう反応をすればいいのかわからない亜栖弥はとりあえずもう一度振り返ってみたが、やはり佇むのは先ほど見た光景と変わらない姿の女性だった。

「――――……えー、と…？」

食堂の裏口だろう所に立ちながらゴミ箱を抱える女性は、全身フリフリの真っ白な衣装にその身を包んでいた。
頭に巻いてある三角巾もフリル付きなら、前身ごろの部分がハート

型になっているエプロンもふんだんにフリルがあしらわれている。
新妻が、裸にエプロンで旦那さんをお出迎えするような仕様のエプロンだと思ってくれていい。
（こちらも勿論フリル付きの）パフスリーブから覗く腕は色こそ白いが逞しい。
全体的に“お母さん”と慕いたくなるような貫禄のある女の人がめるへんちっくな衣装を着ている姿は、破壊力も抜群だった。
――…ああ、こういうの、日本ではロリータっていうんだっけ…。
うっかり現実逃避しそうになった亜栖弥は、目の前の女の人が発した言葉で現実へと引き戻された。

「最近見かける回数が減ったと思えば、こんな所で逢引かい？やだね、ダイエンもまだまだ若いんだ。」
「！！」
「いやだから、タリエンだってば…。」

ちょっとタリエン、名前以外にも否定するとこあるでしょ！
勘違いされちゃっていいの！？
亜栖弥が何か言おうとすると、すかさずタリエンがその口を自分の手で塞いだ。

「あんたたち、もしお昼がまだなんだったら食べていきなよ？腕によりをかけるからさっ」
「そのつもりで寄ってみたんだー。そんじゃま、行って待ってようか亜栖弥ちゃん？」
「うが…っふー！」

言葉は問いかけであるにもかかわらず、タリエンはその手を緩めようとする気配が微塵もない。
亜栖弥が返事をしようともできない状況で無理やり体を引っ張られ

るようにして移動しだしたタリエンを一睨みした後、亜栖弥は食堂のおばちゃんにペコリとお辞儀をして引きずられて行った。

第１１話　おおっと野暮な質問はなしの方向でお願いします。

食堂は亜栖弥の想像を超え、広く大きな場所だった。
無駄に高い天井を眺めつつタリエンに先導されて座った先は、厨房に程近い隅の席で、座ってもなお周りを呆けたように眺める亜栖弥にタリエンがどうだと自慢するように言葉をかけた。

「広いだろ？料理もマジでうまいんだから。」

亜栖弥の目の前に座るタリエンは肘をついてにこにこと笑う。
すでにピークは過ぎているのだろう、２時を少しだけ過ぎた食堂には人が疎らにいるだけだった。
そうして遅くやってきた彼らは皆、料理を掻きこむようにして食べている。
それだけここの料理がおいしいということか、単にお腹がすきすぎているだけかは定かではない。
それでも、ちゃんとした食事をとるのが初めてな亜栖弥は、思わず期待が篭った。
さっきしっかり食べてたんじゃ、なんていう突っ込みはなしだ。
数日物を口にしていない者にかかれば、あれだけの量でお腹が膨れるということはない。
なんていう言い訳を自分にしていると、厨房の奥に引っ込んでいた先ほどの女性がトレーに食事らしきものをのせてこちらへやってきた。

「はいよ、余り物で悪いね。口に合うといいんだけど。」

そう言って差し出されたのは、余り物で作られたようには到底見えない久々に見る豪勢な食事だった。
見た目も女性が好きそうなプレートや小鉢が使われていて可愛い。
先程伺い見た兵士が手にしていた器とは違うところを見ると、こんなところにも気を配ってくれたらしい。

「ありがとうございます…！とっても美味しそうですっ」

亜栖弥は嬉しさに、笑顔で返した。
それを見た女性がやさしい笑みを返す。

「あたしゃここで食事やリネンの管理、その他雑用を一手に引き受けてるアダラ・エマルシーだよ。こんなところでよかったら、ゆっくりしていきな。」
「あ、はい！ありがとうございます！えと、私は今野亜栖弥です。お邪魔させていただきますね。」
「コンノ…？変わった名前だね…？」
「まあどっちにしろ珍しいに変わりはないんだけどアダラ、名前は“亜栖弥”ちゃんだよ。今野はファミリーネーム。」

亜栖弥の答えにタリエンが補足をつけると、へぇと答えたアダラがじっと亜栖弥を見つめ、続けてニヤリとタリエンの方に視線をやった。

「ダイエンにこんな可愛らしいお嬢さんがいるとは、せいぜい逃げられないように頑張るんだね。」

ははははは、と笑って去って行ったアダラに、亜栖弥は豪快なお母さんだと感想を抱くのだった。

改めて目の前の料理に目をやってみる。
向こうの世界にいた時でさえ一人暮らしの身でいた亜栖弥が料理をするのは稀だった。
日々の仕事が忙しく、料理に対する労力を使うくらいなら仕事のために温存しておくという選択をするような生活だ。
おおっと“料理を振舞うような彼氏はいなかったのか？”なんて質問は御法度だ。
私は仕事に人生を捧げている、それでいいじゃないか。
部外者である自分にこんなに豪勢な食事を振舞ってもいいのかといらぬ心配をしながら、亜栖弥は恐る恐る手を付けた。
ちなみに、この世界にはお箸のようなものはないのだろうか、トレーにのせられていたのはスプーンとフォークとナイフだけだった。
まずは一番手前にあった茶碗蒸しのような小鉢にスプーンを差し入れ掬う。
口に入れた瞬間広がったのは、意外にもコンソメ味のような野菜スープだった。
ニンジンやジャガイモが入っているわけでもないのに、ちゃんとそれぞれの素材の味が感じられる。
すごく美味しい。
茶碗蒸しのような出で立ちをしているのに、卵の味は感じられなかった。
亜栖弥はほこほこしながら次の料理へ手を伸ばす。
メイン料理っぽい大皿に載っているのは、どうやらステーキのような肉料理みたいだ。
何の肉か判断はつかなかったが、すでに薄く一口大に切られているそれを上にのっていたソースと一緒に口に運ぶ。
――やばい、とろけそうだ。
見た目がぷるぷるしているわけでもないのに、食感は本当に牛すじのそれだった。

お肉自体の味も、慣れ親しんだ牛や豚の中間のようなもので、すごく食べやすい。
そんなお肉に絡むソースは、爽やかな酸味が広がる濃厚さが実によくお肉と馴染んでいた。
仄かにフルーツのような甘みが感じられるそれは、このソースだけでもご飯のおかずにいける。
機嫌良く美味しそうに食べていた亜栖弥を見ながら、タリエンが説明を加えた。

「今食べてるのは、ラマの肉だよ。質の良い草やミルクを食すから、癖のない良質な味がするのがやつらの特徴かな。扱いやすくてこっちでは結構ポピュラーだよ。あと、さっき食べてたのはたぶん、余ったスープにキキルっていう植物の実を溶かして固めた物だと思う。キキル自体には味がないから、物を固めるのによく使われるんだ。」

こちらを気遣ってか比較的小声で的確な説明をくれるタリエンに、亜栖弥は意外とこいつ有能なのかも、という片鱗を見た気がした。

一飯の恩義、ということで、亜栖弥はアダラに洗い物の手伝いを申し出た。
そんな気遣い無用さ、と言いながらいそいそとエプロンを外しだしたアダラに笑みを漏らす。

「それじゃお言葉に甘えて、アズイが洗い物をやってくれている間にあたしゃ奴らの寝床の整理でもしてこようかねぇ。」

洗った食器は軽く水を切ってあそこに並べておくれと言って指し示された方を見やると、そこにはすでに洗われた食器が種類ごとに分けられて、横長い水切りラックのような入れ物に置かれてあった。

「あと、エプロンはよかったらこれを使っておくれ。それじゃあ、後は任せたよ。」

どこかの棚からエプロンらしき物体を手に戻ってくると、アダラはそれを亜栖弥の手の中に渡し、厨房を去って行った。
そういえばさっき『アズイ』って呼ばれてた気が…と気付いたころには彼女の姿はどこにも見当たらない。
そんな様子を厨房の手前にあるカウンターで肘をつきながら見ていたタリエンは、あははと笑いながらアダラに関する補足を説明した。

「彼女は、人の名前を覚えるのが苦手らしくてさ。正確に言えるのは、自分と家族の名前くらいさ。」

諦めるしかない、と続けたタリエンの方を見ながら亜栖弥はそれもそうかと納得する。
『アズイ』なんて呼ばれ方も偶にはいいかもと思えるほどには、亜栖弥もいいかげんな性格をしていた。
さて、では片付け始めますかと手の中にあった物を広げた瞬間、亜栖弥の動きが止まる。
そんな行動を亜栖弥の背中越しから見ていたタリエンは、何があったのかと亜栖弥の元まで足を動かした。

「どうしたのー、亜栖弥ちゃん？」

そうして亜栖弥の手元を覗いてみると、思わず噴き出す。

あははははと笑いながら滲んだ涙を片手で掬うと、タリエンは留めとばかりに感想を呟いた。

「さすがアダラ。」

亜栖弥の手の中にあった“エプロン”と言われたそれは、フリフリだった。

まるで、アダラがしていたエプロンとは双子だと言わんばかりに同じような形をしているななどと思ったことは気のせいだということでひとつよろしく。

真っ黒に輝くこの物体をこれ以上広げる勇気がないんだけど…、の状態で止まっている亜栖弥の手元を掻っ攫ったのは何をいおう隣にいたタリエンだった。

「はいはい、観念しようねー。汚れちゃったら戻れないでしょう？」

そう言いながら手際よく亜栖弥の後ろでエプロンの紐を結んでいく。

貴・様・な・に・を・余・計・な・こ・と・を！

肩に置かれた手に促されるようにしてくるりと半回転させられた亜栖弥はタリエンとご対面。

「ほらー、似合う似合う。お仕事頑張って？」

他人事だと思って楽しそうにしやがって…っ！

タリエンは新しいオモチャを見つけたように、始終にこにこと楽しそうに笑っている。

いや、自分から引き受けたことなんだからお仕事はちゃんとしますけどね？

うん、だから関係ない人はとっとと厨房から出て行っちゃおうか？

「仕事の邪魔ですとっとと退出よろしくどうぞ。」

いろいろおかしかろうとにっこり笑ってアウェイを指させば、思いはきちんと伝わったようだ。
すごすごと去って行ったタリエンを確認した亜栖弥はシンクの方に向き直ると、よしっと気持ちを切り替えて洗い物に取りかかった。
ちなみに、この食堂ではアダラが厨房とテーブルの間を行き来しないでいいよう、完全セルフサービスになっている。
食事を取りに行くのも自発的であれば食べ終わった食器を返しに行くのもセルフ。
朝・昼・晩と毎日献立は変わるわけだがバラバラな食事を作らなくていい分、アダラにかかる負担は確実に減っていた。
さてさて、まずはシンク周りに置いてあるお皿たちでも片付けましょうかと腕捲りをしてから皿洗いに集中しだした亜栖弥が、彼女に注がれる視線なんてものに気付くことはなかった。

第１２話　あれ、なにが起きたんでしょう…？

「まあ、今日はアズイが手伝ってくれてすごく助かったよ。」
「いえ、とんでもないです。」
「ダイエンの奴もたまにはいいことするじゃないか。」
「だから“タリエン”だっての。」
「よかったらまたきなよ。手伝ってくれる代わりにおいしいもん食わせてやるから。」
「はい、その時は是非。」

洗った食器を水切りラック（引き出しの付いた棚のよう）に戻していった後、お水で汚れた台の上や水気のある上を歩いたことにより床に泥水っぽく残った靴跡を拭きとった頃、タイミング良く再びアダラが食堂に現れた。
綺麗になった厨房を見たアダラは「またすぐに夜の支度を始めるんだからよかったのに、」と申し訳なさそうに言っていたけれど、その表情に抑えきれない嬉しさが滲んでいて、亜栖弥は余計なことをしたんじゃなくてよかったと安堵する。
そうしてテーブルに戻ってお茶なんて飲んで一息ついたところでの会話だった。
タリエンの訂正も単なるノリ突っ込みのように思えてきた亜栖弥は、久しぶりのお仕事に、心地よい疲れを感じていた。
毎日バリバリ働いていたのだ。
部屋の中でじっとしているしかなかった日々はやはり窮屈でしかなかったのだと再認識する。
そうして熱々のお茶で締めくくった食堂を後にした亜栖弥とタリエ

ンは、来た道を戻るために階段を上って行った。
…行きで十二分に学習していた亜栖弥は、掃いて捨てるほどある羞恥とプライドを一旦道端に捨て素直にタリエンの腕を借りていたので、（ほぼ）問題なく上りきることができた。
勿論、にやにやしているタリエンの腕に渾身の力で爪を立てることも忘れなかった。（↑ちょっと成長したと思う。）
あれ待てよ？
食堂に顔を出すときはもれなくこの階段が付いてきちゃう？
という事実に今更ながらに気付いた亜栖弥が愕然としていたのはまた別のお話。

森に足を踏み入れて程なくした頃だった。
亜栖弥とタリエンの前に、第三者の影が現れる。
「あれ、もしかして鍛練場（ジル）に行ってたの？」
亜栖弥の部屋を警護するうちの1人、サイニア・ウェルクスがやさしげな風貌にやはりやさしい声音を乗せて問いかけてきた。
「こんにちは、サイさん。」
「なんだサヴィー、いないと思ったら外に行ってたの？今、亜栖弥ちゃんを僕らの食堂に招待してきたところだよ。」

「ちょっと町に用があってね。それにしてもよかったよ、亜栖弥ちゃん食べられるようになったんだ。ここの食堂は美味しかっただろう？」

前半はタリエンに、後半は亜栖弥に向かって言ったサイニアは、会話をするには少し遠かった距離を縮めた。
サイニアはそのやさしい風貌や落ち着いた態度から亜栖弥よりも年下であるにもかかわらず、兄がいたらこんな感じなんだろうかと思わせるような、亜栖弥にとってお兄さん的ポジションにいた。
実際一人っ子である亜栖弥には兄弟のいる感覚というのはわからないが、こんなお兄さんがいたらいいなと思う亜栖弥の願望がタリエンに対するよりも彼女の態度を軟化させる。

「はい、とっても。何度でも通いたくなっちゃいました。」

階段がなければ、と付け加えた心にタリエンが噴き出したが、亜栖弥はそんな奴のことは見なかったふりをしてサイニアへと言葉を続けた。

「心配かけて、ごめんなさい。もう、大丈夫です。」

サイニアはじっと亜栖弥の方を見つめたかと思うと、ふっと顔を綻ばせる。

「もう、無理しちゃだめだよ？」
「はい。」

サイニアに気にかけてもらえることが嬉しい亜栖弥は、破顔した。
そんな無意識の表情に魅せられたのは1人だけではない。
タリエンははっと我に返ると、2人だけの世界を作っている亜栖弥

とサイニアの間を裂くべく後ろから亜栖弥にのしかかるように抱きしめた。

「仲間はずれ反対。」

子泣き爺よろしく体重をかけてくるタリエンに呆れながらも、亜栖弥は半ば諦めたような口調で言った。

「暑苦しいですよタリエンさん。」

「どうして亜栖弥ちゃんはいっつも僕にだけ態度が冷たいのさー？それに、僕のことは“ダン”って呼んでって言ってるでしょ？」

「…私には、どうして“タリエン”が“ダン”って呼び方になるのか理解できません。」

未だ亜栖弥から離れないタリエンに、なんとか腕を離してもらおうと肩から前に回っているタリエンの腕をいろいろな角度から引っ張ってみるがびくともしない。

そうして亜栖弥が奮闘している間考え込むように沈黙していたタリエンが次に発した言葉に、亜栖弥はん？と首を傾(かし)げた。

「――…もっかい言って、」

「？」

「“タリエン”って、もっかい言って。」

「――…、はい？」

回された腕に、力が篭る。

「――――…“ダン”って呼んでもらった方が親しげに聞こえるかと思ってたけど、“タリエン”って呼び捨てにしてくれるなら、そっちの方がいいや。」

うん、こいつの考えることはわけがわからん。
そんな思いで一瞬現実逃避をしてしまったことが悪かったのか、亜栖弥は次の瞬間タリエンに正面から抱き上げられた。
脇に手を置かれタリエンを見下ろすその様は、傍から見れば小さい子どもが大人に“高い高い”をされている状況と酷似しているわけで…。

「呼んでくれるまで離さない。」

にやりと人の悪い笑顔を見せるタリエンは、亜栖弥の顔が羞恥で真っ赤になっている様を見て、益々その笑みを深めた。
しかし、亜栖弥のそんな態度も長く続くことはなかった。
2人の周りを少し強めの風が吹きぬけていく。
その風に靡いたのは何も亜栖弥の髪やスカートだけではなかった。
重力に従うままだらりと伸びていた亜栖弥の足に絡むかのように、亜栖弥のそれが風に押された。
――そのことで、亜栖弥は自分の置かれた状況を正確に認識してしまったのだ。
抱き上げられたことによってタリエンよりも高くなってしまった視界。
足を動かしても捉える地面のない心もとない世界。
亜栖弥の視界がくらりくらりと傾ぎだす。

「――――…ゃ…、」

次第に小さく震えだし、涙の滲んできた亜栖弥の状態に気付いたタリエンは戸惑った。
――泣かせたの、オ　レ！？
自分でも思っていた以上に混乱してしまっているタリエンは、次に

取るべき行動も思い浮かばず石のように固まってしまった。
そんなタリエンの手の中から亜栖弥をさらったのは、予想通りというべきか、2人の目の前で静かにことの成行きを見守っていたサイニア・ウェルクスだった。
サイニアは亜栖弥に「大丈夫だよ」と安心させるように声をかけながら、ゆっくりと地面に腰を下ろした自分の上で亜栖弥を横抱きにした。
サイニアの服をしっかり掴みながら小さく震えていた亜栖弥は目を開けようとはしない。
そんな亜栖弥の顔にかかっていた前髪をゆっくりと払いのけながら、ついでに顔や頭の至るところを好きなように撫でたサイニアは、次第に落ち着き寝入ってしまった亜栖弥を見て大切なものを愛でるような眼差しで微笑んだ。
そうしてタリエンの珍しい行動についつい傍観者となり行動が遅れてしまった自分のことを責めつつも、サイニアはタリエンを窘めることも忘れない。

「ちょっと、調子に乗りすぎちゃったね。」

サイニアに叱られたタリエンはしゅんと肩を落とした。
自分でもわかっているだけに、（あんな態度でも）普段慕っているサイニアに叱られることはタリエンにとって追い打ちだった。
眠ってからもサイニアの服を離そうとしない亜栖弥に目をやっては、益々ダメージを受けるタリエン。

「とりあえず、亜栖弥ちゃんのことはこのまま僕が部屋まで運んで行くよ。…タリエンは、まだ警護続けるでしょ？」

次の交代までもう2時間もない。
今日の夜はサイニアが担当だったっけ…と静かに考えながらタリエ

ンは頷いた。

第13話　虚ろな状態での出来事を覚えてろなんて、言いませんよ、ね？あれ？

フフ、――ちゃんだあいスキ！

僕も、あーちゃんのこと好きだよ。

フフ

フフフ、

どこまでも続くお空。

地面も遠い遠い、大きな木の上で。

一緒に上って一緒に世界を見ていたのに。

気付いたときには――ちゃんを見上げてた。

大きな木から、ひとり、落ちながら。

背中に感じた、温かさに、戸惑いながら。

どうして？

違うよね？

わたしがドジだから。

きっと、わたしが足をすべらしちゃって、落ちちゃっただけでしょう？

ドシンという大きな音に意識が遠くなる。

そうして忘れたわたしの記憶（カコ）。

＊　＊　＊　＊

自分の額に触れる指先の感触で、亜栖弥は静かに目を覚ました。

外はすでに薄暗く、あれから何時間も経っている。

目が覚めてからもぼーっと宙を見ていた亜栖弥は、心ここにあらず

といった態だった。
傍にいたサイニアはゆっくりと上体を折ると、亜栖弥の顔を覗きながら問いかけた。
「目が覚めた？」
その言葉と視界に入ったサイニアの顔で夢から現（うつつ）へと意識を戻した亜栖弥は、日頃の彼女からは想像もできないようなか細さで返事を返した。
「サイさん…、」
「――今、夜の１０時だよ。…簡単な夕食は取ってあるんだけど、どうする？」
安心させるように笑顔を向けたサイニアに対し、その問いにふるふると弱弱しく答えた亜栖弥は、未だ心の半分は何処か別のことに囚われているかのような瞳をしていた。
サイニアは、重ねて亜栖弥に問いかける。
「…何か、夢を見ていたの…？」
「――…夢……を、見ていたような気はするんですけど……それがなんなのか…、思い出せなくて…。」
「…気になるんだね？」
「……はい、」
すごく、悲しい夢だったような気がする。
亜栖弥は心の中で呟いた。
そうか…、と続けたサイニアは一旦亜栖弥の傍から離れると、テーブルに用意されていた水のようなもので満たされた容器からグラスへと中身を注ぎ、それを持って再び傍へとやってきた。

「少しでもいいから、飲んでほしい。」

起きられる？と聞きながら亜栖弥の背へと手を回し、サイニア自身もゆっくりと上体を起こした亜栖弥の隣へ腰を下ろす。
亜栖弥の様子を窺いながらちびちびと飲ませるサイニアは、グラスに浸る液体から香り立つにおいを吸い込み、先程のことを思い出していた。
この液体は、サイニアが夕食の用意をしにやってきた女中へ準備するよう頼んだ、謂わば栄養剤のような飲み物だった。
警護するようになった以前の亜栖弥の生活は知らないが、ここに住むようになってから昨日までは水以外一切口にしていなかったのだ。
それをまた食べたり食べなかったりでは栄養も偏ってくるだろう。
そんな思いがあって女中へ頼んでみたのだが、頼まれた女中は目を点にして驚いていた。
どこにそれほど驚く点があったのかと訝しんでいたサイニアは知らない。

彼が、誰に対しても態度を変えることなくやさしく接していられるのは、彼にとって周りが皆同じに見えているからだ。
気にする必要のない、取るに足らない人物に。
それは、ある意味究極の無関心だった。
そして、彼にとっては態のいい隠れ蓑にもなる。
だから彼は分け隔てなく、同じやさしさを同じように配ることができる。
何も疑問に思わない女たちは彼にやさしくされることを幸運のように考えているが、感の良い人や見る目のある人であれば、彼のそういった酷薄なまでの等しさに思うところを感じている。
そんな彼が、本当の意味で他人を気遣うなどというのは、今までの

彼からしてみれば考えられないことだった。
それ故に彼にとっては珍しい――本人にしてみれば無意識の行いは、たまたま食事の準備をするために訪れた、感が良く、日頃のサイニアの態度に思うところのあった女中に驚きを与えた。

時間をかけ最後の一口まで嚥下していく亜栖弥の様子を窺いながら、サイニアはほっと息をついた。
そっと亜栖弥の額に手をやれば、人間らしい温かさが戻っている。
――先程何の気なしに彼女の髪を梳いていた指先を額に持っていけば、ぞっとするくらいの冷たさをしていたのだ。
このまま消えてもおかしくないと思わせる程温度の感じられないそれに不安を覚えていたサイニアは、再び戻った体温に安堵した。

「眠れる？」

そう聞けばこくりと小さく頷く亜栖弥に愛しさを覚えながら、サイニアはにこりと笑いかけた。
そうしてゆっくりと亜栖弥の身体を横たえたサイニアは、グラスをテーブルに戻すため立ち去ろうとした。
しかしそれを阻止したのは、自身の外套のほんの少しの部分を握る、小さな手だった。
つん、と控えめに握られたそれに一瞬忘我したサイニアは、その状況を理解すると彼にしては珍しいほどに狼狽(うろた)えた。
まさか、こんなことで自分を乱されるとは思ってもみなかった――そう思いながら、サイニアは風に頼んでグラスを戻してもらうことにした。
まるで縋るようにこちらを見てくる亜栖弥をたとえ一瞬でも1人にすることはできない。
できるはずがない。

サイニアは、自分では彼女を安心させるつもりで――実際には小さな子どもを甘やかすような締まりのない顔で――微笑むと、外套を握っていた亜栖弥の手を己のそれで握り直しながら囁いた。

「安心していいよ……――ずっとここにいるから、ね？――――…おやすみ。」

ここに第三者がいれば、皆一様にピシリと動きを固めながら“自分ハ何モ見テイナイ”という顔をするのだろうと予想できるくらいには、日頃のサイニアを知る者にとって、それは考えられない行為だった。

ある者は、背筋を走る悪寒にぞっとしたかもしれない。

本人の与り知らぬところで無意識にフラグを立てた亜栖弥ではあったが、この夜のことを彼女が覚えていないことは、唯一の救いかもしれない。

第１３話　虚ろな状態での出来事を覚えてろなんて、言いませんよ、ね？あれ？

この世界は、日本とは時間の流れ方が違います。
ですが、時間の読み方や経ち方までオリジナルにしてしまうと、（読み手も書き手も）面倒くさいことになると思い、同じにしています。
ファンタジー感が薄れてしまっていることにああああと思わないでもないですが、試運転をしているこのお話では今のところこの設定で運行していきたいと思います（＾ω＾；）

第１４話　うっかり地雷を踏んでしまったようです。…なぜに？

パチリと目が覚めた亜栖弥は、しばらく辺りの様子を窺うようにそのままじっと寝台（ベッド）から動かずにいた。
カーテンを通り過ぎて突き射す日射しは早朝のものではない。
寧ろ昼に近いのだろうと思われる強めの日射しを浴びながら、亜栖弥は昨日の出来事を思い出していた。
…思い出してはみたのだけれど、思い出せた記憶は森の中でタリエンに抱き上げられた辺りで途切れている。
いつの間に自分の部屋に戻ったのだろうか。
昨日の自分に一体何があったのだろうと訝しみながら、亜栖弥はようやくゆっくりと動きを開始した。
そうして昨日のままの服装であることに気付きひっそりと安堵すると、クローゼットの中から適当に服を見繕って着替える。
（ちなみに昨日は紺色のワンピースを着ていたので、今日は落ち着いたトーンの黄緑色ワンピだ。というか若草色？）
いつもならサイドテーブルにあるはずの飲み水は、寝台（ベッド）の前のテーブルに用意されているようだ。
コップに移して飲んでみると、ただのお水だったいつもとは違い、亜栖弥の口の中にアセロラのような爽やかな味が広がった。
誰かの気配り？などと思いながら一息ついた亜栖弥は、寝室と居間とを繋ぐ扉を開けて一歩進んだ。
その途端、衝撃と誰かに包まれる温かさが亜栖弥を襲う。
視界に広がるのは、いつもこの部屋を警護する時に彼らが来ている隊服のようなもので。
「よかった亜栖弥ちゃん！大丈夫？どこか悪いところはない？」

どうやら目の前で自分を拘束しているのはタリエンらしい。
いつものお調子者な成りは姿を潜め、本当に亜栖弥を心配してくれているようだ。
はて、そんな心配をかけるようなことがあったっけ…？と思いながら、腕を突っぱねようにもがっちりホールドされた状態からひとつも身動きできない状況に、亜栖弥はだんだんと苦しくなってきた。

「…っ大丈夫ですから、離してください。」
「――あ…っごめん、ね…？」

どうして傷ついたような声を出すのだろう。
亜栖弥を解放し、心なしかしょんぼりしているタリエンがワンコように見えるのは気のせいだろうか。
うん、気のせいだよね？
水色の髪の間から、白っぽい毛の混じったグレーの耳がへにゃりと垂れているのが見えたって、あのタリエンが犬属性だなんてないないない。

「えー…と。――実は正直、タリエンさんに抱き上げられてからのこと、よく覚えてないんですよ。目の前がくらくらしだしてそのまま気が遠くなっちゃったような？」

その言葉にタリエンがそっか…と元気なく呟いたかと思うと、どこからかクーンという犬の鳴き声が聞こえてきた。
ああどうしよう、とうとう幻聴まで…。
目の前にいるタリエンは申し訳なさそうな顔をしつつも、どこか期待しているような目を見せる。

「……タリエン？」

亜栖弥がこれで合っているんだろうか、と思いながら発した言葉にタリエンは予想以上の反応を見せた。
犬だ、ここにワンコがいる。
そんなことをやっていると、外から静かに扉をノックする音が響いた。

「リーゼリア・タクルスにございます。亜栖弥様がお目覚めになられたとのことでお伺い致しました。朝食のご用意はいかが致しましょう。」

今現在、私の身の回りのお世話をしてくれる人――女中なのだと聞いた――は、3人いるらしい。
朝食と夕食の用意をしてくれるのがこのリーゼ、昼食やお茶の用意をしてくれるのはミリーで、部屋のお掃除や湯浴みの用意だとか身の回りのお世話を焼いてくれるのがレイシアだ。
中でもリーゼは22歳と、自分と一番歳が近いせいか、亜栖弥は勝手に親近感を持っていた。

「あ、じゃあ、お願いしまーす！」

扉の外から“畏まりました”と返事が返ってくると、コツコツという足音が遠ざかって行く。
そうして意識が朝食に向いた途端、亜栖弥のお腹がぐぅと鳴った。

「あれ？」

昨日私ってば、夕食食べてたっけ…？
そんな疑問が亜栖弥の中に過ぎる。
しかしいくら考えてもアダラのところでお昼を頂いてからその後、

何かを口にしたという記憶は出てこない。
…そりゃ、お腹もすくよね？
ぐぅぐぅ鳴り続けるお腹に“だから恥ずかしくなんかない”と言い訳しながら、部屋の中で視線を彷徨わせた。
すると、ふと目に付いた居間のテーブルのうえに昨日までにはなかったものが鎮座していることに気が付いた亜栖弥は、満面に笑顔を咲かせた。

「はさみー！」

タリエンを置いて嬉々としながらテーブルに近づいた亜栖弥は、そこに蓋のついた入れ物も一緒に置かれているのを見ると、手にとって匂いを嗅いでみた。
――…うん、懐かしい匂いがする。
きっとこの、オメメぱっちりの黄色い顔に赤い帽子（ふた）をかぶせたような物と同じ匂いをさせているこれがノリだろうとあたりをつけた亜栖弥は、えへえへと緩みそうになる顔を（本人的には）頑張って引き締めた。
そんな亜栖弥の様子を見ていたタリエンは、不思議な顔をして首を傾けた。

「そんなに喜んで、一体どうしたの？」
「やー、これってば王様に頼んでた物なんですけどね？昨日の今日でもう用意してくれたみたいなんですよー！」
「ふーん…。…そんな物、一体何に使うのさ？」
「え？何って…、いつ戻ってもいいように、今のうちにプレゼンで使う資料の準備をしておくんですよ。いつまでもこんなのんびりした生活続けられないだろうし、やれるうちに少しでもやっておきたいなーと。」

勿論タリエンには、亜栖弥の言う“プレゼン”が何なのかわからなかった。
しかし、これでやっと暇な時間も有意義に使えるんだと浮かれていた亜栖弥は気付かなかった――自分が喋りすぎていたことに。
急に静かになった空気に気付いた亜栖弥は、タリエンを見た。
そのタリエンはといえば、嫌なものを見た時のような、言いようのない感情を持て余したような顔をしていた。

「なに、それ…。」
「…え？」

亜栖弥には、タリエンがなぜそんな顔をしているのかよくわからなかった。

「――――…ここからいなくなるなんて、許さない。許さないよ。」
「――――…それは、タリエンが許す許さないにかかわらず、王様が決めることですよね…？」

そう言うと、タリエンは苦虫を噛み潰したような顔をした。
タリエンの言葉の中に、“この世界からいなくなること”が含まれているのだとしても、尚更誰にもどうしようもないことなんじゃないのか。
そんな思いを込めて見つめる亜栖弥に対しタリエンは言葉を発しようとしたが、どれも音になる前にタリエンの口の中で消えてしまった。
タリエンだとて、わかっているのだ。
突然現れた亜栖弥の処遇に関して、一介の兵士である自分がどうこう言える立場になどないということ。
不安定な亜栖弥がこの世界から消えてしまうかもしれない未来も、タリエンにはどうすることもできない。

それでも、目の前で嬉々として自分の世界へ戻ることを前提とした行動をされると、苛立つ。
亜栖弥にとって、この世界のことが何一つ彼女を引き留める材料にならないことに、どうしようもない腹立ちを感じた。

「――――ちょっ！！」

だからタリエンは、亜栖弥の手の中からそれらを奪い取った。
そうすることで、まるで少しでも長く彼女のことをこの世界に引き留めることができるかのように。

「亜栖弥ちゃんがこの資料とかいうものを完成させようって言うんなら、僕は意地でも邪魔するから。」

ついさっきまで豆柴のような雰囲気を出していたタリエンは一転、怪しい雰囲気満載にニコリと笑顔で宣言した。
そんなタリエンの豹変っぷりについていけない亜栖弥は暫くぽかんと呆けたのち、引き攣りながら言葉を発した。

「はい？」
「亜栖弥ちゃんが資料作りに手を裂く暇がないくらい構い倒してあげる。」

いや、そんなオプションいらねーからと少々口が悪くなってしまったところで、誰にも責められまい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3230s/

夢の果てに見たものは、

2011年7月20日12時20分発行